

Inches

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

Centimetres

Kodak

LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black





2913  
14

昭和九年  
七月六日

貞操婦女八賢誌

東都

狂訓亭主人編次



初日

第九七回

佛縁と現して青柳一賢を説く  
夥兵を刺して阿力義忠を誼ぶ

當下這所へ来りて人のいも怪しき一個の修行者巖木綿の  
單衣の裾小短く収りひびてある色ある脚半甲樹菌織  
笠りて面を隠し鮮やかなる髪と脊負て折戸のわたりに  
身を寄せし裡面の花子を窺ふ今青柳とお道との問答  
不のふ聞へは孩さるるも左右きく入らば竊足しう近

女八賢三輯の五



よ 寄りて椽側の這方より生垣の間み身をひそめ猶も松子を圍て  
居り裡面より二個が夫どもも神もぬ身の知るようなればお道六  
燈刀の鞘を受取り先其刃をせりし心ひりけるお前の言活然  
どもお前と吾侪と六柳由縁のありとも知らず況て過世の縁は  
と六柳が死お前のか的活是の六柳を子細りし奈何と  
疑問の青柳完尔と打笑て其疑ひの介る変りてお前も  
覚へてごんせう思ひ出せ六去年の秋折も戸田の川舟で  
お前ハ神子さん吾侪ハ順禮鈍くも老女ハ歎く是不覺の  
柳枝引く及お前ハ不覺の妙術で逃れ一跡ハ吾侪

ひとり奈何なる真面目逢ふ変りと思ひの外み計りども引く  
先ハ神宮より那藪中山満化寺にてお舟の尼ハ見来み一  
始て園一過世の因縁其子細ハ他もなき長録初之年  
豊嶋の家ハ内乱起り奸臣了の時を得て國家をさへに  
横領を一割へお家の正統なる光姫さぬ  
若さぬを致害するさんと計りしを光姫さぬの乳母なる液に  
と奥より忠義の女中速くも其機を推せし六密ハ両  
君と鳩若伴ひて武藏下総の間ハ忍を其身ハ自ら尼と  
まりお舟の比丘と法名ハ一躍念佛ハ変寄せて再び豊



鳴家與之の自方と集る今最中お齊の尼とさるる  
只此一條のさるるど其昔豊鴻家の一木を以て八體を作り  
りしる弥陀佛あり信作殊の愛りしる豊鴻家内乱の  
時臨して忽然として突たりき不思議とゆふ尾のさるる  
お齊の尼の仮寐の爰に彼八體の阿弥陀佛現然とさるる  
汝豊鴻家再興の赤心尤も賞まじし吾八體も豊鴻  
家小徳を因のひるをりて當家の衰亡見るも忍びざる  
更佛身をひるぐし人間界の生をまじし八個の乙女と化現し  
當家再興の力を尽さんゆめく疑ふまじしと宣ふ程に

夢覚より夫よりしお齊の尼のさるる佛身の身を思ふ  
りて道德堅固の尼傳とさるる筆で件の八賢女を身なせし  
自方とさるる豊鴻の家と再興せんと縁て自傳の神占て  
種く在家とトひしゆりまご時運の到るる八個爰に  
俱宜せねども一木を以て造りしる弥陀の化身を  
のせ送ひし親の異るるも過世を言ふて呪符同前魅て  
八賢俱宜して心似しる當家を佐人和女も豊鴻の由  
緒ある丸塚殿の浪人の處女のさるる八個の一箇を  
今より八個の在家とさるる一日もさるる豊鴻家を再び

女八賢三輯の五



興を計りて憑り此度より又彼捕へ一田舎神女もあらず  
賢女の一個もいとも那の心は頼ひあれば奇術を以て遣れ  
きん余もいとも因り縁ありて再會ハ猶遠くいと最委  
細なる尼君の作は駭く此身の素性今佛縁を身あけて其  
名の変はあはれなる者お前と吾侪のそとにぞまぶ此池の三個  
あり其一個ハお前の妹はお袖さんの結髪梅太郎とハ飯の  
名めて實情ハ豊鳴の忠臣なり一神宮秀齋の處女  
お梅次ハ八代次ハお安と一個この身のうぬと其身の更  
え取ませ一伍一計を如此くと更落もなく物語は

お道ハ清閑了と思ひぞ小膝をたこと打ち借ハ日外ハ田川の  
小船で逢ひ一もお前おて那とき悪婦とおのひより彼船  
長も尼君のかりたり私等二個共誘はんとの更なり一  
もあつたは頼ひたる此身を賊らみ囚ひて思ひ  
たる仇討の其宿願も慥ハねバ奇術せりて身と道  
る今のお前のか的活でたどりて知る吾侪の身のう  
恁まを勝目一人と過世の縁のひらんと六斗さざりける  
今宵の嬉しきまゆて思ひ合はるるが當りかぞんま  
那お友より関より一河瀬川あての緯の末由其時心願



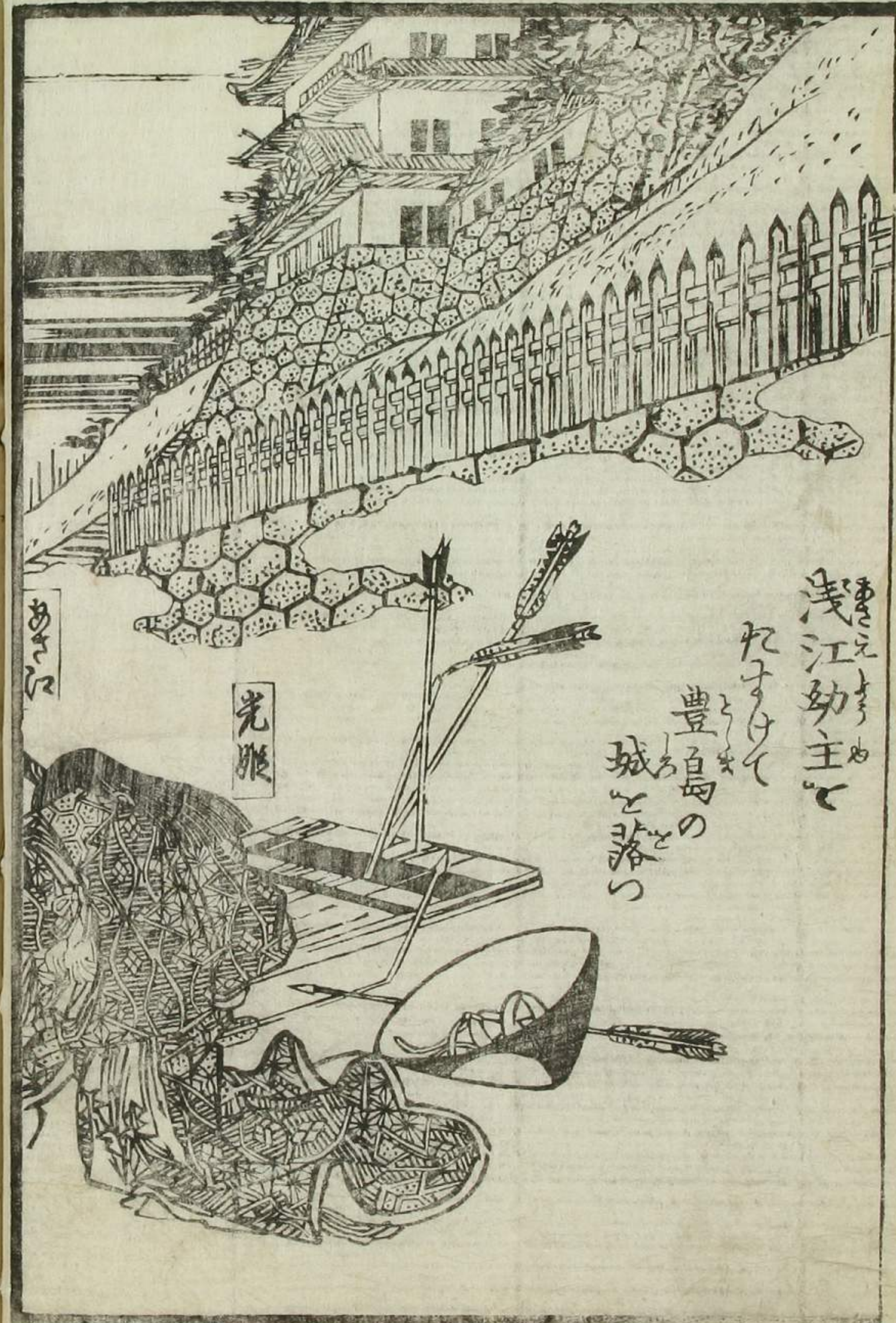
奪ひしりの変よりしてお座敷にお梅等三個を賢婦を  
思ふせりて會て自方お憑まん跡を慕ふて行しのみ今日  
まで音信のあつりしりまお道ハ錦の旗の再びよめ入る  
更を得てお友と討てて定正を規ひ撃んとせしやご思  
ふども腕の乱れおそくぬ不覚をなすりしりよ又汁ふる  
後を得て今妻ふ及び一更まで倅如此と報おめぞ  
青柳ハ関女おひりひハ族又ハ感とて頼お膝をまわける  
其時お道ハ佛壇より以前の凶旗を取出して貌ちを  
あつら言活と正一寔お母が今宵お的活帳今過

世の因縁々々とも恁まを義ある賢女をかくし  
あつら奪ひ物思ハせしりまお本とさ人も西三及誓  
敵の思ひせせしり吾身あつらも鈍まやと最面あけお暗活  
ゆぞ青柳関つ打けしてお道さん其格なむつりハ入ぬ  
更互にお因縁を結ぶるハ親とを異色替らぬお親材遠良の  
るいハ隔ぬお糸糸ともめ吉めつけ凶まおつけお道さん會  
相渡しと豊嶋の家の再與とて言ふお道も打魚頭  
やど嬉しお前のお言活あつりてお梅さん等ハお改め  
家へおさんせぬやうおうらハ是のまらてお友ハいふせし更





三輝



浅江幼主

れすけ

豊島の

城と落し

光服

あさけ



ぞとお道が言へば青柳も俱々案ずる胸と胸互ひ顔を見合  
せ思ひのねて居るうらうら道はまうとむ月をお前へつと思ふ  
知らぬが此地の鎌倉へ遠うねども入煙少山多け且ど  
為や園路の踏まよひあつた方へ往もささし受ひても  
お清ねハ勝の覚へいお友さのいも此家へ帰らぬハ是も又  
誣し且定正の退まの軍兵再び推寄せある度ひりて  
不思議の災ひなりとも言ひ且ぞ丹と其俵の打捨て爰  
物せ思ふ人より這等あつたを那死と腰を身ねて俵の  
獲へてのどぐろし身と起共青柳もまご其意のあごひ  
まひつんととまる折しも何時の間のみ入てけん黒  
装束せし四個の殿兵椽の下より這ひ出てお道青柳の  
二個を目撃する十と打振くヤツト樹の聲と俵の  
双方整し組付と二婦ハ強がどつとよし準備の握刀  
後にも見せど右と左の二個の殿兵と水もささし毛撃  
つと猶懲むる近寄る二個子面倒なと青柳お道  
襟がも取つて三間をうり外面の方へ投げつる介ども屈せぬ  
二個の殿兵勇婦の投げら且も猶起より七組つると

女賢三輯の五







さんも吾侑も信の小躍り七夫しうりお友をあるべし金嚮小  
此家へ来つゝ見ろふ青柳さんハ急速くも遠行の在るの  
お道さんとの同答殿中極子奈何と思ふゆゑひそか  
脊戸の方より廻り納戸の中へ忍び居て残らざれば  
始終のふ酌活を息ふ付ても氣がらふか安さんの身のゆゑ  
今手を取へてせんせぬハ善も難も是乃のわらぬまうらぬ  
奈何やと言へばお道も青柳も八代も又お友等も互ひ  
眼と眼と見合はしと思ひかねて居りける其中の彼お  
理喜ハ殿兵の死骸を戸辺へひかりお梅青柳八代ハ先初対  
面の禮と誼次にお道ハ打對ひ吾侑度ハ過一日の行瀨  
川へお友ハ別且お梅さん等のお跡を退ひ折もあらず  
お道さんの思へば言解て自方にお勧めりしと  
塚村まを参りしお青柳さんの危急の極子まゆあふこと  
お二個ハお安ハ袖をとまを身と作りし神宮全交帰と大六  
どのを欺きおんせせ青柳さんをお救ひるる思へば推せし  
ゆゑハ其夜ひそか大六どのの邸の間近き小舟の中へ身を  
ひそか極子奈何と窺ひしお梅お遠くお二個ハ青柳極子  
伴ひて邸をお逃さるるまを始終の極子と見定む







皆さぬに今ぞ此家をおまひりて吾侪どもの後家へ  
お越しつりしを聞しよりまはして此ハ公安堵其夜の母と  
清り明して翌日己の牌なる頃知縣めをとりてさるるも  
ねる修行者次女め身とかり那地を發足多うも郷の當  
地へ来り着しお巷の人の噂を聞しお洲崎のなるこの松  
原の管領さぬの行列を乱妨する婦女つりて今戦  
ひの最中と聞し胸まら轉て急ぎ洲崎へ到らんとする  
道の程めて日ハ暮り宵闇さるるも覺へし乃ゆぬ置に  
便せて仍着しふとや戦ひの果し後めて四辺の人氣もあ  
らざる本意多く那処をさるるて此家へ来りて討ぶども

お道さぬと青柳さぬの決し積るお的活を洩瀾のとも  
今度でお梅さぬ方お両女めお同ふりて一吾侪の依  
喜是の増りのありと赤心つりて言の兼よと多く感  
嘆乃りつりける

第廿八回

瀬戸の曉天お於道秘書を焼く  
客路の暮提お惡僕愚直を欺く

案下お梅お黙然とてお理喜か酌活を聞居らうし  
稍つりて首をりてげ寔お惡の其身お報ふ今ゆらぬ



まゝなり 那神宮屋の輝家といふに現在吾侪の伯母を  
ども素より心頑ゆて夫の悪を諫ハせど却て悪よりを伎倆  
ゆゑ早に其身を丈六が非道の刃ふ失ひしより自業自得といふ  
まゝに候令吾侪の難面とも血筋ハ絶ぬ伯母をうとをわし人バ  
ゆゑ悲傷とわろりと鬘を一帯の泪も涙を賢女の操感  
びる中の中八代ハ四辺ふまると氣を配り皆えんゆゑ思ひ全  
今まて千草の啼連し耳亥し蛙の夢一時止し心  
湯ど若や此家へ敵兵のひそふ押寄来しものる介もあは  
唯氣がらふお安きん今手を此所へもどせんせぬハ奈らるる  
ゆゑのひしゆハ兎もあは此家をまきり行儀を尋ね諸  
侶ふゆゑの國へ逃れまきんハ不忠義の禍ひましとも言れ  
皆さん奈ゆ思ふんまと言ハきてお梅も青柳も心をれ  
付く其中ふお道ハ屢くお安源吾侪の危急を救はん  
其後不行時打捨盡し一云来まきん六清信中と言ふ  
あが又更不行迎ふを一鈔の旗せうやくをふあつむ  
お梅不渡し七儲のふき昨日までも今日までも一筋ふ



爺さんの健骨と一思入定正を敷果さんと思ふより他の  
寶とあつたつらつら屢々巾旗を奪ひしり今さら悔ひても其  
詮をい交せ惜しめて捨つるは恨も賢且一人今小園を  
後びいうあつた健骨を敷日のみくてもや采ん介まれば此  
身小自得せし奇術も今入つて益あり素よりくる  
幻術八人の耳目を迷まのそのて仁義を守れ真勇婦の  
深くも初る所なるは今あつて術を久し再び用ゆる  
度ひらりと言ひつ後て懐けぬ秘をうらう奇術の書を  
出せ六六理喜もすこお友もあましく取りぬき忍術の秘書を

お道六受取りて皆清信の行辺る圍爐裏の中へ投込む  
あど時しも吹来る夜嵐のまると燃ま一焰の猛火と侶に  
伴の秘書の煙りととりてを失ふける斯る折しも外の方より  
俄に起る陣鐘と偲み関ゆる関の聲は這方へ覺ぬの四  
賢女二勇婦敵の合ふて四面倒と身縋ひしり脊戸口  
よりひそりふ忍びてま出く人最も危ふき度なるん話説  
分西腹儲も多塚の里長より一杓を勝が處女か竹の思ひ  
寄るまも大六の家賊残らむ関行せむ其身も早も神  
をうと又討つまも青柳の輔に其場を逃まつて那鉄八の





苦七くしちが  
 甘舌かんぜつ  
 鉄八てつぱちを  
 計はかりる





伴らるる指て約なき當らみけきと須臾も猶豫もるとその小  
あつねバ兄梅太郎が鎌倉へ行くと聞くと當ら相模路  
さうして趣しめ俸なき時と途申めてお竹ハ俄に病ひ不  
侵さる一歩ととも歩行得ねバ鍛八ハまさしく獲ま候と  
まろく此得ぬを鎌倉まで行かざり只言へ這辺に放ん  
あて着も追隊の出合なき其時逃る及らぬと千々公ハ  
さげども力づくでも及らぬの世あり主と病めて是非  
なく其地の旅店を憑り買の一晚を借受りお竹を其  
所忍び居て種々医療を尽せども左の右急使の驗なく  
空しく明月を往るを速くも秋と冬も其年も了り  
暮ら明は文明六年の春もあふ及びいともお竹ハ枕の  
あつねの重るといふいふねども頓に全快なりけきと  
鍛八ハいふいふあて者病愈るまはりけきと這地の  
止めてよりとや八月もあつねの盤纏も今に残りお竹  
余ども追隊の沙汰なけきとあつねの心易く其次の目より  
鍛八ハいふ四辺の百姓の昼の終日雇われて候の後とあつね  
菓茶と旅籠の料の望し一夜の終夜者病し須臾も猶  
赤い最有りけき老僕も不送爰のまゝの多岐の



里より一那神宮屋の奴僕苦七の嚮け平左衛門の言はく  
戸田河原より袖をひそふ誘ひ多り一六定めて殿の  
寝美ひとんと思ひの外ぬ其凶法もかく口禁せしむる  
のと鑑を女中もいつつおぼ苦七の心中より比介も乃んま  
極もまきて徒更とまりいさし其夜俄の郡館より六六自  
走向ひて夫婦をとり家内の者を残りまく砍尽せしむる苦  
七の奸智の園うる者の忠ひそふ床下へ忍び入りまく命を  
助りても身の半銭の貯へもなく此終めて六何國へも走り  
ととぬへども當野の長居もをそれぬは六尺より直さぬ相模路へ  
かきしつれ性道ゆゑ深裡は六守辺の田の畔あて余は目もやび  
耕作者あり近寄るまふふよりく視目六豈斗らんを譲て  
庄官本もあが家の老僕鉄八のてぞらうけは六噴く這奴を  
竹をばの此辺のりりぬ又び居てうる野為ともをさうん然  
まは六青柳梅太郎まは彼両婢の袖をも此辺の忍びて居る  
りの基六六神宮屋を乱妨るせし紀りとの六那青柳  
逆る故も他の子細のりりともかぬは六今鉄八をひそふ  
欺き那考が在家を因出し搦捕て縛ひのへを直せ功の神  
宮屋の款式いさぬ吾物もいんと忽地奸計を新作意馳て

文賢三輯の五



件ことのさ鉄てつ八はちがは四しりり入い近ちかく我われと寄より夫つまふふる人ひと妻つま塚つか多た鉄てつ  
八はちのやめめのさめめとい言いひひけけはは是こゝ鉄てつ八はちのやめめ打うち鉄てつ多た見みええるる  
余あ宣のたまふふ神かみ宮みやをを苦くる七しち更さらでで在あららるるここ言いふふ這こゝ方かたも  
打うち鉄てつ頭あたまののもも吾われ們らのの苦くる七しち更さらのの身みとと吾われとと其その以もつてて  
久ひさししきき洲しゅう際さいででののつつふふああるる七しち月げつのの漣うね動うごくくももおおんん身みハ  
嫌きらむむとと救すくひひかかししてて逃にげげるる後のちのの國くにもも忍しのびび在あららるる  
風かぜのの便たやすみみもも聞きここええるる一ひとのの借かりりのの這こゝ辺へのの世よをを忍しのびびてて言いふふ  
とととと鉄てつ八はちがが胸むねハハ有ありりやや无なししのの関せきふふ人ひと目めをを忍しのぶぶ身みハハ包つつみみ  
せせとと頭あたまのの目め色いろををささららるる奸えん智ちのの苦くる七しち打うち金かね笑わらひひくく小こ腹はらをを

我われもも鉄てつ八はちのの上かみ余あれれるるのの孩こころままるるもも人ひとののをを寄よりり候まを令たま吾われ們らが  
関せきふふとともも知しららぬぬ振ふるとと通とほるるのの其その所ところがが縁ゆかりのの会あいいひひのの色いろも  
程ほどののああるるものの多たしし然しかしし一ひと言いへへ日ひ頃ころ腹はら悪わるきき神かみ宮みやをを使つかひひ  
るる吾われ們らののゆゆゑえ其その極ごく小こ疑うたがひひつつるるもも及およぶぶ理ことわりももああららずずおおんん身みもも這  
辺こゝにに在あららるるままたた在あららるるのの極ごく子こもも國くにをを一ひとつつららんんがが昨きのう夜よ鐵てつくくの  
神かみ宮みやををへへ子こ細こまくく知しららぬぬももおおかかしし縣あまのの丈たけ六むささるるままのの殺ころすす  
兵へいをを引ひ俱ぐしし七しち案あん内ないももななくく擊うちち入いりり且かつ那なまま使つかひひのの入いりり及およぶぶ  
家いへ内うちのの者ものどどもも残のこりりななくく砍きたたままはは一ひと其その時ときにに吾われ們らののハハ  
運うんぶぶもも不ふ思しふふ命いのちをを助たすけけるるてて爰こゝにに逃にげげてて來きりりななれれもも

女に賢けん三さん輯しゅうのの五ご



盤纏の貯へともなく況て初づき先もなけむ此野より

おん身の住る方へ吾們をばりて此場の難を救ひぬ

頼知まのり一言あり其子細い他ならねども縁ておん身

知りて通るお知縣の非道身情とのみて六露法もさく余

の心なるま神宮をま支國々通りの仕合せも是六梅太郎

まは兄弟且青柳と喚り乙女の數金髪は今もいづく

衆くおん身這辺に忍び居て今日まで進隊の出食

ざる人僅ひぬて道まゝり然るも吾們ハ主の放は他

寄辺もさ身たるふおん身と回まよりまは是れ今より

おん身と心を合せお行さぬ女は是れおまは遠き方へ伴ひ

ゆた其所の斯頃怒りて折須見合せお地頭へお知縣の

非を治へ理非明白のゆりてさるる神宮と莊官の両

家とては前のごとく取立て約束も是れ神宮へ梅太郎

さぬと養子とさしお袖さぬと娶合さるる那嬢の頼ひの叶ふ

のそく亡か且那も本意もらん又お行さぬハ何れも

能き算さぬと撰むひうへて全き清さぬの跡をまゐる双方

全きまると併て眞榎芽お及夏ハゆらと口をうけ

兵の住をて實一ゆり説惑りをもて正直一客の銀八



かの<sup>たか</sup>は<sup>たか</sup>の<sup>たか</sup>疑<sup>ひ</sup>一<sup>が</sup>尋<sup>ふ</sup>伎<sup>倆</sup>の<sup>畏</sup>め<sup>落</sup>て<sup>お</sup>竹<sup>が</sup>  
 病<sup>氣</sup>の<sup>夏</sup>の<sup>来</sup>由<sup>今</sup>猶<sup>旅</sup>店<sup>の</sup>あ<sup>り</sup>る<sup>夏</sup>を<sup>一</sup>伍<sup>一</sup>付<sup>を</sup>  
 譚<sup>る</sup>ゆ<sup>ぞ</sup>苦<sup>七</sup>ハ<sup>心</sup>沖<sup>密</sup>ろ<sup>ふ</sup>よ<sup>ろ</sup>と<sup>び</sup>と<sup>名</sup>謀<sup>成</sup>就<sup>し</sup>ぬ<sup>と</sup>  
 思<sup>ふ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>色<sup>の</sup>も<sup>も</sup>を<sup>も</sup>馳<sup>せ</sup>て<sup>銀</sup>八<sup>の</sup>誘<sup>は</sup>る<sup>彼</sup>旅<sup>店</sup>ゆ<sup>ぞ</sup>  
 到<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>必<sup>竟</sup>苦<sup>七</sup>が<sup>計</sup>得<sup>て</sup>又<sup>甚</sup>麼<sup>も</sup>の<sup>夏</sup>と<sup>り</sup>る<sup>を</sup>開<sup>け</sup>  
 次<sup>の</sup>巻<sup>を</sup>分<sup>解</sup>と<sup>听</sup>ね<sup>る</sup>一<sup>村</sup>田<sup>也</sup>

貞操婦女八賢誌四編卷五



